

## 学 長 式 辞

商学部、大学院の新入生のみなさん、みなさんは、今日から、小樽商科大学の構成員になりました。心より歓迎し、お祝いを申し上げます。本日のこの式にご臨席を賜りましたご家族のみなさま、ご来賓の方々にも篤く御礼申し上げます。

今から百年前、本学の前身である小樽高等商業学校の初代校長渡辺龍聖は、入学式のなかで、新入生を前に、「これからは諸君を紳士として遇する」と言いました。「紳士」とは、男女を問わず、自立した個人として自由と責任のもとに行動し、学ぶ人のことであります。これは今でも本学の教育の精神です。百年前に渡辺校長が示した方針のもとで、戦前、北海道では唯一の文化系高等教育機関として、戦後は商学を中心とした社会科学系の単科大学として、本学は、「実学」、「語学」、「品格」をモットーとする教育を展開し、北海道のみならず全国に、社会を支えあるいは社会のリーダーとなる人材を送り出してきました。

本学の伝統は独特の「実学教育」にあります。ここでいう実学とは、仕事にすぐ役に立つ知識という意味ではありません。みずからの専門に加えて幅広い分野の知識をもち、その知識を用いて現実の問題に取り組む能力・意欲を育てることにあります。本学はまた、「国際感覚を備えた品格ある人材」の養成も目指してきました。それを支えるのが、「語学教育」と幅広い「教養教育」です。「語学教育」も百年に及ぶ歴史をもっていますが、社会科学系の大学では珍しい多言語主義と言語コミュニケーションを重視した実践的な教育を行っているところに特徴があります。

本学は、社会の変化・変容に対応して不断の教育改革を行ってきました。現在、ICT機器を備えた教室を整備し、学生が能動的・主体的に学ぶ態度（アクティブ・ラーニング：実学教育の要素）をより一層身につけさせるための先端的な教育方法やe-ラーニングと対面授業をブレンドした語学教育の開発に取り組んでいるところです。

みなさんご存じのように、今の日本社会は、多くの課題を抱えています。高齢化と少子化が進み、雇用が四〇%近くは非正規雇用であり、格差が徐々に広がりつつある社会です。そして東日本大震災と東京電力福島原子力発電所の事故からの復興という大変困難な課題を抱えています。さらに、地域や国が、相互に強く依存しあうグローバリズムが支配する社会です。

このような時代に生きるためには、自分自身の置かれている位置、アイデンティティーをしっかりと見据えるとともに、異なった文化・考え方に対する理解、他者とコミュニケーションする態度を養うことが必要です。そのため、現在、グローバリズムの時代に社会を支え、組織のリーダーになる人材を養成することが求められており、多くの大学がそのための改革に取り組んでいます。本学も、今年度から「グローバル・マネジメント副専攻プログラム」をスタートさせます。このプログラムの特徴は、地域・国のことを理解した上で（ロ

一カ所に軸足を置いて)、多の地域や外国との関係を考える(グローバルな視点で行動する)人材を、経営・マネジメントの教育の分野で育成することにあります。新入生のみならず、是非、このプログラムに挑戦してみてください。

大学での四年の生活は、みなさんの長い人生のなかでは、僅かな期間にすぎません。しかし、それは、将来に大きな影響を与える重要で豊かな時間です。大学での学問・学びは、これまでのような単なる知識の詰め込みや受験のためではなく、自分自身の成長と仕事につながるものです。大学での学びにおいては、苦勞をさけてはなりません。たとえ興味の湧かないこと、苦手なこと、自分自身に直接役にたたないと思われることであっても、決してあきらめずに取り組んでください。

もう一つ、みなさんにこの場でお伝えすることがあります。この会場・体育館の玄関横に碑が建っています。今から三年前、本学のグラウンドで運動クラブの学生が飲酒で死亡する事故が起きました。この学生は、入学したばかりの一年生でした。私たちは、亡くなった方に衷心より哀悼の念を捧げるとともに、二度とこのようなことが起こらないように生命・安全を守ることを誓いました。これはその「誓いの碑」です。未成年の飲酒は法律で禁止されています。また、飲酒は、場合によっては大変危険をとまなう行為です。みなさんとくに大学一年生の諸君においては、大学の指導を守り、健康と安全に注意して大学生活を送ってもらいたいと思います。

本学は、冒頭で述べましたように、旧制の小樽高等商業学校が、戦後そのまま新制大学・小樽商科大学になってできたものです。当時全国にあった高等商業学校は、帝国大学に併合されたり、他の高等教育機関と一緒にあって総合大学の経済学部になりました。本学も北海道大学の経済学部にするという政府の方針がありましたが、教員や地元の人々は単独で大学になることを強く望みました。当時の大野純一校長(初代学長)は、政府に対して、「本学は、創立以来学生を遇するに青年紳士をもってし、学生と教官の間には人格的接触がある。また、学校と卒業生と地元の間にも密接なつながりがあり、常に一体となって助け合っている。こうしたところでこそ人と人との接触によるほんとうの教育が行われるのである。」と述べて単科大学としての存続の必要性を訴えました。

これが本学の教育の原点であります。私は、これまで行ってきたように、小さな大学の特徴を生かし、教員、職員そして学生が生き生きとした交流を通じて、みなさんとともに、新しい小樽商科大学を作っていきたいと考えています。

みなさんのこれからの大学・大学院での生活が稔り豊かなものになることを祈っています。

平成二七年四月三日

国立大学法人小樽商科大学長 和田健夫